

C24

新編

國語讀本

高等小學校
兒童用

卷六

福岡縣立師範學校

書

圖

言語部

部

冊數

番号

架

三

八

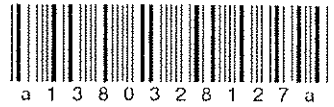
號

34740

T1A3

10

Ko97k



a 1 3 8 0 3 2 8 1 2 7 a

福岡教育大学蔵書

新國語讀本

卷六

高等用目次

一

株式會社普及舎

新編國語讀本 高等小學校用 卷六 目次

第一課	わが國の國風	一
第二課	病院船	五
第三課	遠足ノ記事	九
第四課	木の葉と蝶々	十三
第五課	コロンバス (一)	十七
第六課	コロンバス (二)	二十一
第七課	米國ノ農業	二十五
第八課	棉花と綿布	三十
第九課	孟母	三十三
第十課	子守女のせわを頼む	三十八
第十一課	老人ノ眼識	四十

新編

國語讀本

高等小學校
兒童用

小山左文二
武島又次郎 合著

東京

株式會社普及舎

第十二課	伊藤圭介	四十四
第十三課	動物の工藝	四十九
第十四課	動物の生存競争	五十三
第十五課	七福神の話	五十八
第十六課	孔子	六十二
第十七課	威海衛の激戦	六十六
第十八課	水雷の話	七十
第十九課	川中島の戦	七十五
第二十課	逸話三題	八十二
第二十一課	郷里の第につかはす	八十六
第二十二課	釋迹	八十九

新編 國語讀本 高等小學校 兒童用 卷六

第一課 わが國の國風

わが國の國風は、世界にまたとなく美しい。この國風は、なかなか一朝一夕に出来たものではなくて、遠い昔の神代から始つたものである。

組織。

神代の頃は、今のよゝな國家の組織はなくて、皇室の御先祖を御本家と申さうなら、我等の先祖は、數多の御分家のよゝなものであつた。

人皇の代となつて、御本家の長とまします
す 神武天皇が、天下を御平定遊ばされて
から、皇室と人民も出来、國家の組織も始
めて出来た。

安穩 情誼
それゆゑ、國民といつても、もとは、皇室
と御同族であるから、建國以後となつても
君は民を安穩なれと祈らせ給ひ、民は君を
御繁榮にましますと祈る。その情誼の厚い
ことは、父と子の間柄に似て居る。

かういふ間柄であるから、人民の 皇室

を敬ひたてまつる風は、非常なものである。
従つて 皇室に對する禮儀は、實に正しい。
それで、わが國は、昔から、君子國とほめられ
て居る。

協和
また、人民は、協和一致して、君の御ためと
國のために、あらん限りの力をつくし、常に
勇猛は、温和柔順なものも、一旦、事が起れば、勇猛
剛武。剛武な氣力を生じて、水火の中へもをどり
入る。それで、わが國は、世界の武勇國と稱せ
られて居る。

皇統

かよーな國風は、求めて得られるものではないが、幸ひにも、わが國は、國家の出來たもとが家族であるゆゑ、家族に固有な人情から起つて、數千年の間に、この國風が成り立つたのである。それゆゑ、世の中が、どのよーに變つて來ようとも、この美くしい國風は、連綿たる皇統とともに、萬世不易である。

ワカ國ニハ、上ニ萬世一系ノ 天皇マシマシ、
下ニ忠孝勇武ノ臣民アリ、共ニ、一心同體トナリ
テ、コノ國土ヲ永遠ニ保タンコトヲ期セリ。

遺憾

古來、ワカ國ガ、一タゼモ、外國ノアナドリヲ受ケタルコトナキハ、主トシテ、コノ美ナル國風ニ基ヅケルモノナリ。

第二課 病院船

明治二十七八年戰役の起るや、日本赤十字社は、大いに、傷病者の救護に力を盡したりしが、ただ、一つ遺憾なることありき。それは、他にあらず、傷病者を御用船にて送るに、いまだ、病院に著するに及ばずして、治療の期を失ふもの多かりしこと、これなり。

や、各國の船艦、および軍隊は、盛に、これを歓迎したり。これより、兩船は、わが軍の傷病者は勿論、各國の傷病者をも載せて、廣島豫備病院に輸送せしこと前後七回、救護せしもの三千餘人に及びたり。

されば、各國の司令官は、書狀をわが國におくりて、あつく感謝の意を表し、かつ、わが赤十字事業の整頓せるを賞讃し、なほ、この美舉を、くはしく、本國政府に報告したりといふ。

整頓

勿論

第三課 遠足ノ記事

今日ハ、遠足ノ當日ナレバ、未明ニ起キテ、天氣ヲウカガフニ、曉星明カニシテ、輕風枝ヲ動カセリ。喜ビ勇ミテ、手早ク、水浴ヲ行ヒ、身仕度ヲトトノヘ、食事ヲスマシ、宵ノウチニ準備シタル握飯ヲタヅサヘ、草鞋ヲ穿キテ立チ出ヅレバ、東天スデニ白ミワタリヌ。カクテ、露深キ野路ヲ急ギテ、街道ニ出デタルニ、二三ノ學友ノ影、ハルカ向ウニ見エタレバ、走リテコレニオヒツキ、トモニ學校

宵
草鞋

ニ到リヌ。

郊外。

ヤガテ、一同集リタレバ、體操場ニ整列シ、ツツシンデ、先生ノ告諭ヲキキ終リ、勇マシキ喇叭ノ聲ニ導カレツツ、郊外ニ出デタリ。

小憩。

邊ニ出デタリ。ココニテ小憩シ、先生ヨリ、コノ川ノ水源・流域、オヨビ、川ト町村トノ關係ニツキテ、委シキ講話ヲ承リヌ。

ソレヨリ、川ヲ渡リテ、村ニ出デ、ヤガテ、一小丘陵ノホトリニ著ス。ココニテ、一時間バ

採集。

カリノ休憩ヲ許サレタレバ、我等ハ、空氣銃・採集箱・蟲取網ナドヲ手ニシテ、思ヒ思ヒニ、

叢

叢ニ分ケ入り、アルヒハ、野菊・桔梗ナドヲ折

リ、アルヒハ、コホロギ・バッタナドヲ捕ヘ、アルヒハ、ムレユク小鳥ヲウチナドシタリ。

獲物。

ヤガテ、集マレノ喇叭ニテ、一同集合シタルニ、先生ハ、我等ノ獲物ニツキテ、オモシロキ理科ノ話ヲセラレタリ。

攀

我等ハ、十ホ進ミテ、丘陵ヲ越エ、谷ヲワタリ、坂ヲ攀キテ、山ノ頂ニ達ス。先生ハ、諸方ヲ

指シテ、カノ帶ヲ引ケルガ如キハ、先程渡リ
シ川ニシテ、青々トシタル海ニ白キモノノ
見ユルハ、帆前船ナリ。遠ク雲ノ如ク見ユル
ハ、富士ソノ他ノ山々ナリ。山ノ向ウナルハ
吉田村、山ト山トノ間ナルハ大石村ナリ。中
ニモ、ワガ村ハ、モットモヨク見ユ。ナドト教
へ給ヒヌ。

契

サテ、モハヤ、正午頃トモナリシカバ、山上
ノ石ニ腰ウチカケテ、晝食ヲ喫シ、シバシ休
憩シテ後、山ヲ下リ、モト來シ道ヲ通りテ、午

後四時頃、ツツガナク學校ニ著キタリ。

遠足は、ただ、身體の樂になるばかりでなく、學
問の助にもなるものである。すなはち、道すがら
山や川のよ—すを見ると、地理の研究となり。動
植物や礦物を調べると、理科の知識を増す。また、
古跡などをたづねると、歴史を學ぶ助になる。こ
れ等は、書物の上のみでは、出來ない學問である。

第四課 木の葉と蝶々

かすめる朝日さしとひて
のどけき春の山のかげ
しげれる木の葉の下蔭に

一羽の蝶ど舞ひあどぶ

時に木の葉のおもふよー

枝のくさりにつながれて

うごけぬわれにひきかへて

うらやましきはかの蝶よ

われかの蝶に身を代へて

こころのままにとび得なば

とこの花かげここの草

いかにたのしくあるべきを

蝶もおなじくひとりごと

うらめしさうにつぶやきぬ

あああしたよりゆふべまで

やまず飛ぶ身のせあしさよ

われかの木の葉に身を代へて

しづまりやすむことを得ば

ひととせながらおちつきて

いかにたのしくあるべきを

霞の奥におはします

春の御神はこれを聞き

さらばのどみをかなへんと

霜

あやつりたまふ年の絲

たのしき春もいつか去り

うれしき夏もいつか暮れ

霜おき野風ふきすさぶ

秋のころともなりにけり

見よかの飛びし蝶々は

たのしき春のすがたなく

羽くち足も折れくじけ

岩の根もとにしづまりぬ

梢にありし木々の葉は

さかえし春の色もなく

枝のくさをうしなひて

あはれや空にちりまがふ

第五課 コロンバス (一)

コロンバスは、今から四百年ばかり前に、
イタリー國のゼノアで生れた。子供の時か
ら、天文や地理などの話がすきであつた。成
長の後も、これらの學問に、一番身を入れた。
コロンバスは、いろいろと研究した結果、
「この世界は、當時、世人がいふよーな平なも

答

のではなく、金くまるいものである。それゆゑ、もし、東の方から印度へ行くことが出来るとすれば、西の方からも、やはり印度へ行かれる筈である。と信じた。また、見なれぬ器物や草木などが、海邊にただようて来るのを見て、西の方に、まだ、人の知らぬ土地があるに相違ない。と考へた。

それのみか、コロンバスは、印度の東に日本といふ國があつて、金銀財寶に富んで居るといふことも聞いてゐたゆゑ、今、西の方

説

へ航海したならば、きつと、この國へ行くことが出来るに相違ない。といつて、熱心に、西方航海の事を企てた。

しかし、コロンバスは、貧乏であつたから、自費でこの航海をすることが出来ない。それで、まづ、ゼノアの有力者を説いて、航海の費用を求めた。けれども、だれもみな、コロンバスの説を信じないゆゑ、一人も、應じてくれないものがなかつた。

そこで、コロンバスは、よんどころなく、ポ

ルトガルや、スペインにいつて、その國王に謁見して、熱心に、自分の説を述べた。けれども、いづれの國王も、一こゝ取合つて下さらなかつた。

頼

コロンバスは、もう、この上は、佛國の王か英國の王でも頼むより外はないと思つて居た。ところが、そのころ、スペインの皇后にイサベラといふ賢明な御方があつて、コロンバスの説は道理である。と考へられ、かつは、その志をあはれに思召され、とーとー、御

拔。錨

自分の裝飾品などを賣り拂つて、航海の費用をこしらへて下さつた。

コロンバスは、天にも昇る心地がして、大船三艘をととのへ、これに、百二十人の水夫を載せて、いよいよ、西曆一千四百九十二年の八月三日の朝、多くの見送人と別れて、パロス港を拔錨した。

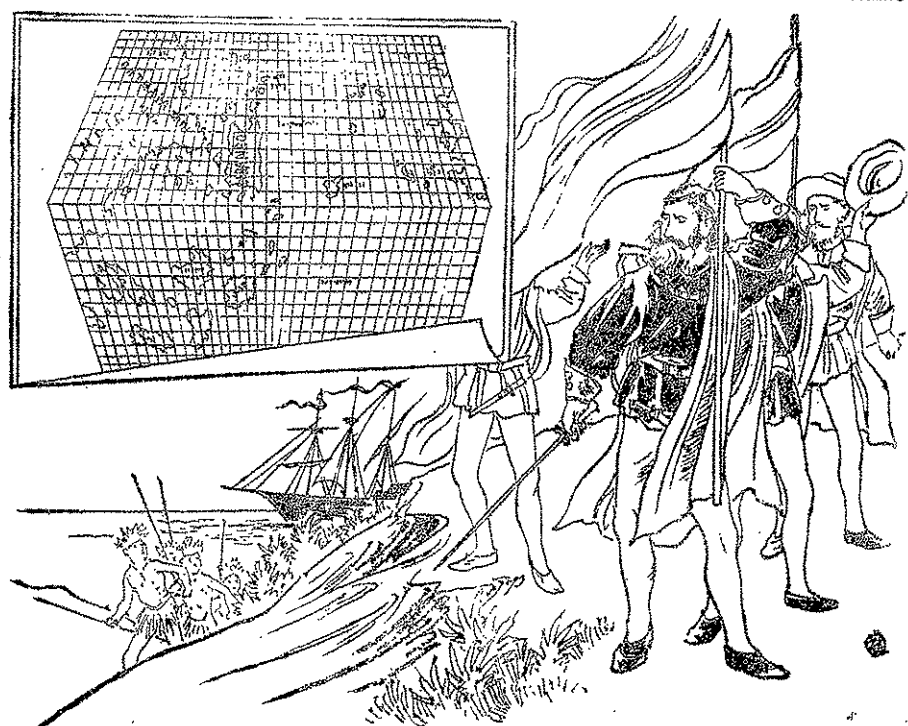
第六課 コロンバス (二)

コロンバスの船は、パロス港を出て、西へ向つて進んだ。その頃の人々が、世界の西端で

あると思つて居たカナリー島を通り越してからは、行けども行けども、ただ、ひろびろとした海ばかりであつた。

二箇月ほどになつても、陸地らしいものも見えなかつたので、無智な水夫どもは、だんだん、コロンバスの言葉を疑つて、あるひは怨んだり、あるひは怒つたりして、歸國をうながした。そこで、コロンバスは、いろいろと、水夫どもを慰めて、今から三日のうちに、陸地が発見せられなかつたなら、歸國しよう

怨 疑



うと約束した。それから、コロンバスは、夜もろくろく寐ずに、甲板の上に立ちつづけて、ただ、向うの方ばかりながめて居た。いよいよ、三日目の夕方になると、細工を

漂

した木のきれや、樹の枝などが、波に漂うて
來たので、陸地に近づいたに相違ないと、一
同うち喜んで、大いに勇みたった。

放

その夜は、るか向うに、火の光が見えたの
で、一と一喜んだ。夜中すぎになると、一番さ
きの船から、一發の號砲を放って、陸地の近
づいたことを知らせた。一同は、狂氣のよ一
になつて、甲板にかけあがつて、向うを望ん
でゐると、夜がだんだん明けて來て、朝霧の
下に、ありありと、一帯の陸地があらはれた。

朝霧

一同の喜びは、どんなであつたらうか。

やがて、コロンバスは、船を岸に漕ぎつけ
させ、スペインの國旗を朝風にひるがへし
て、乗組の人々と共に上陸した。これが、同年
十月十二日の事で、ともとも亞米利加發見
のはじめであつた。

第七課 米國ノ農業

開拓

亞米利加合衆國ハ、氣候温和ニシテ、土地
廣大ナレバ、數十年來、歐洲等ヨリ移住シテ、
開拓ニ從事スルモノ多ク、從ヒテ、種々ノ機

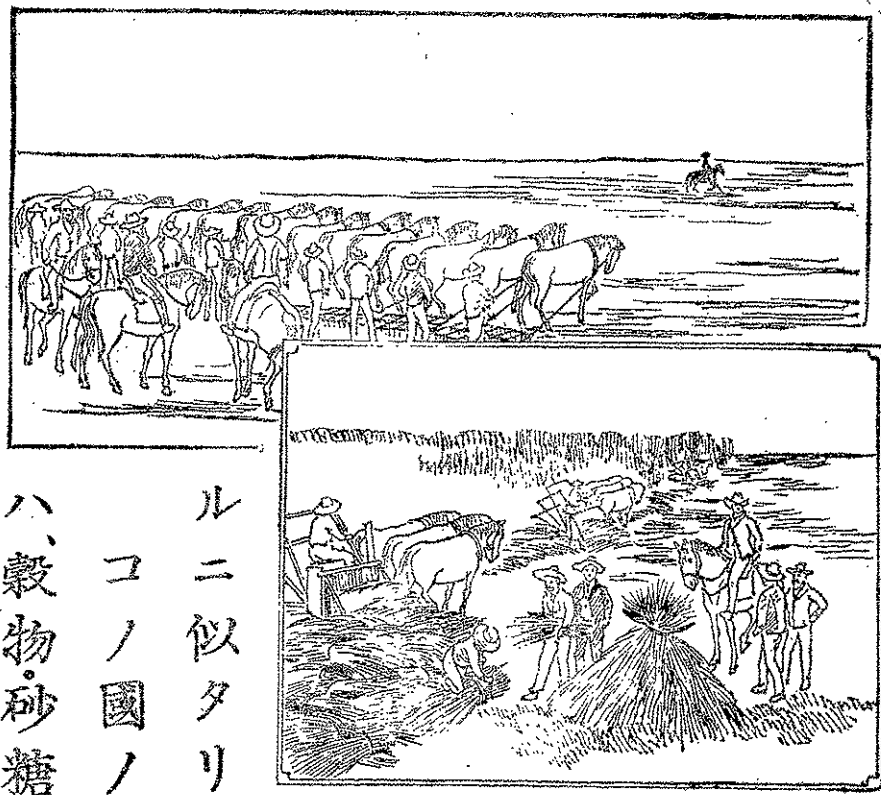
田。圃

械ヲ發明シ、盛ニ農業ノ進歩ヲ圖リシカバ、
今ヤ、田圃大イニ開ケ、中ニモ、みすしっぴー
河ノ西方ト、かりほるにや州トニハ、一望、天
ト接スルガゴトキ廣大ナル耕地ヲ見ルニ
至リヌ。

一。斑

コノ國ノ農業ハ、オホムネ、大農法ニヨリ、
機械ヲ用キテコレヲ營メリ。左圖ハ、スナハ
チ、ソノ一斑ヲ示シタルモノニテ、上ナルハ、
畑ヲ耕ストコロ、下ナルハ、小麥ヲ取り入ル
ルトコロナリ、小麥取り入レノ法ハ、ソノ仕

藍



ルニ似タリ。

コノ國ノ主ナル農產物
ハ、穀物・砂糖・綿・烟草・藍・玉蜀

組、キハメテ大
キク、各地主ガ
數多ノ人夫ト、
馬トヲ率ヰテ
野ニ出デ行ク
サマ、サナガラ
軍隊ノ進行ス

黍ナドナリ。コトニ、穀物產出ノ量ハ、ギハメ
テ多ク、歐人ノ食スル穀物ハ、大半、コノ國ヨ
リ供給セラル。

コノ國ハ、タダニ農產物ノ多キノミナラ
ズ、牧畜業モ、マタ、ハナハダ盛ニシテ、ソノ牧
場ノ廣大ナルト、飼養法ノ整頓セルトハ、實
ニ、目ヲ驚カスホドナリ。ソノ中、モットモ盛
ナルハ、西部諸州ニシテ、豚、羊、牛、馬等、オノオ
ノ數千萬頭ヲ飼養セリ。

コノ國ニハ、森林モ、マタ、到ル處ニアリ。コ

豚

樺

トニ太平洋沿岸ノおれごん州、オヨビ、かり
ほるにや州ニアル森林ハ、モットモ廣大ニ
シテ、樺、松、樺等ノ良材ヲ產ス。ソノ樹木ノ高
サ三百尺以上ニ達スルモノ少ナカラズト
イフ。

合衆國は、氣候も溫和であるし、土地も肥沃で
あるゆゑ、歐洲やその他の國々から、多くの人々
が移住した。これらの人々は、いろいろの機械を
發明して、盛に農業の進歩を圖つた。それゆゑ、こ
の國は、田圃が次第に開け、農產物が年々に増し
て、今では、世界第一の農業國となつた。

棉花。

第八課 棉花と綿布

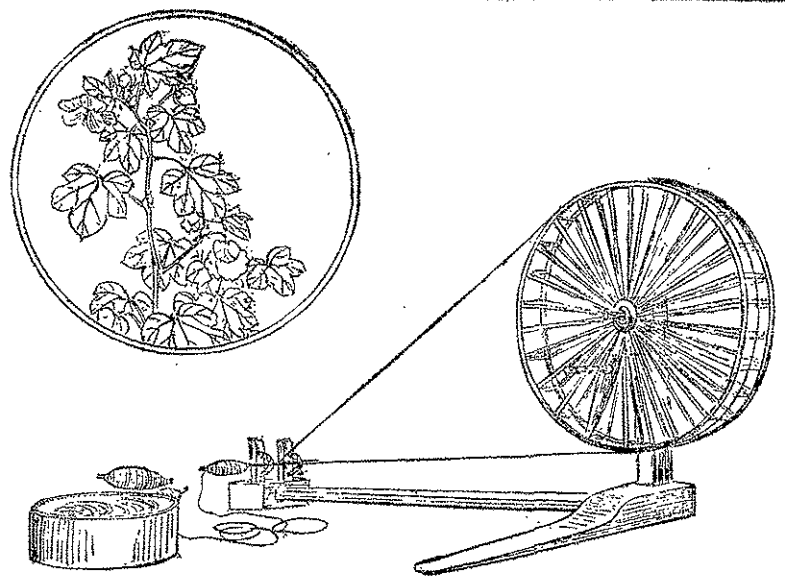
棉花は、草棉より取りたるものなり。草棉を作るには、水分ある砂地をもつともよしとす。地味よきに過ぐるときは、莖葉のみしがりて、棉花を産すること、かへりて、少なきものなり。

摘 裂 播

草棉は、春、種子を播き、夏、花を開き實を結ぶ。實は、桃の形に似、熟すれば、おのづから裂けて、棉花を吐く。

綿絲を製せんには、まづ棉花を摘み取り、

條卷



日光にさらしたる後、ろくろにて、その種子を去り、次に、綿打器械にかけて、うすくのべ、さらに、小指ほどの太さなる條卷として、これを紡ぐなり。

されども、今は、蒸氣力によりて、運轉せらるる大仕掛の紡績機

械にて製すること多し。この機械にては、種子を除きたるままの棉花を、ただちに、繰とすることを得るなり。

わが國は、近來、綿絲紡績の業、頗に進歩し、棉花の需用、大いに増加せり。されど、内地の棉花は、その質堅くして、細き絲を紡ぐに適せざるのみならず、供給乏しくして、價も、また、貴ければ、多くは、印度・支那等より輸入す。綿絲にて織りたるものを綿布といふ。綿布は、絹布の如く軟かならず、また、美しから

軟

洗濯

ざれども、その質丈夫にして、よく洗濯にたへ、かつ、毛織物につぎて、體温を保つに適するがゆゑに、常の衣服とするには、これに及ぶものなし。

綿布中、わが國より輸出するものは、本綿・縮綿・ふらんねる・白木綿等にして、外國より輸入するものは、金巾・綿・縐子・雲齊織・更紗・寒冷紗・綿びろーど等なり。

孟母。

第九課 孟母

孟母とは、支那の賢人孟子の母なり。孟子

幼なかりし時、その家、墓地に近かりしかば、日々、近隣の兒童等と共に、葬式のまねなどして遊びけり。

母、この有様を見て、心うく思ひ、「これ、子を育つべき處にあらず」とて、そこを立ち去り、市のほとりに住みけり。

かくて、孟子は、日々の遊戲に、商人の物を賣買するまねなどしければ、母は、「これも、子を置くべき處にあらず」とて、さらに、學校の傍に遷りけり。

遷

猪

孟子、これより、禮式を見習ひければ、母は、大いに喜び、つひに、住居をここに定めたり。ある時、孟子、その近隣にて、猪を料理するを見、母に向ひて、「あれは、誰のために料理するか」と問ひければ、母は、ふと戯れて、「あれは、汝に與へんがためぞ」と答へけり。

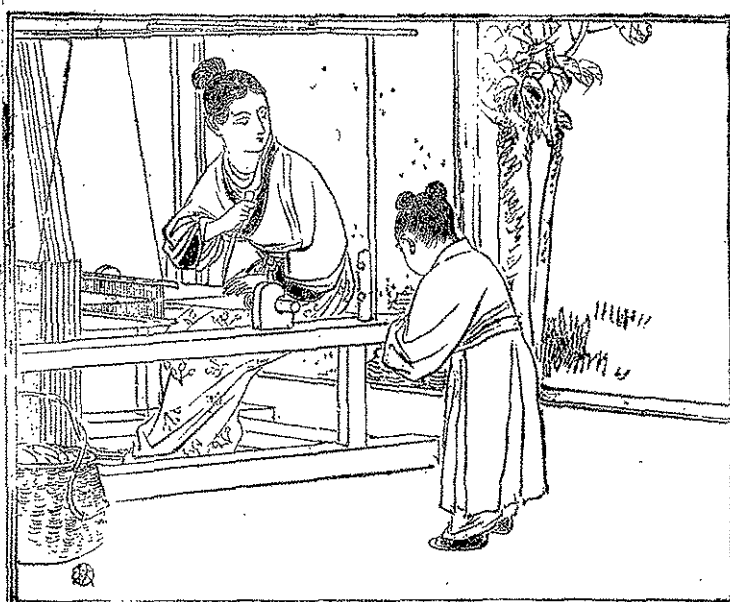
ややありて、母は、ひとり心に思へらく、「古の人は、子の生れぬ前より、子のために深く言行を慎みけりと聞くを、あれ、この子のすでに生れて、まさに、智恵づかんとするに至

詐

り、かかることをいひしは、これ、詐を教ふるものなり。ああ、あれ過ちけり。」とて、ひとかに猪の肉を買ひ來りて、孟子に與へたりき。孟子、すでに長じて後、他に出でて學問せらるに、年經て家に歸り來りぬ。をりふし、母は、機を織りゐけるが、孟子を見て、「汝は、學業を成しとげたるか。」と問ひけるに、孟子は、「いな、勤學にたへずして歸りぬ。」と答へけり。母は、これを聞くやいなや、刃物を取りて、その織物を斷ち切り、「汝、中途にして、學問を

廢

致々



廢すれば、これ、この機の如し。およと、人は、よく學びて後、はじめて、器を成し、よく問ひて後、はじめて、知を廣むべし。汝、今、學問を怠らば、後に至りて、かならず、悔ゆることあるべし。」と諭ししかば、孟子、大いにさとり、それより、致々として、勉め學び、つひに、大學者とな

りて、後の世まで、尊び敬はるるに至れり。

第十課 子守女のせわをたのむ

雇
拜啓、このたび、私方にて、子守女を一名雇
ひたしと存じ居り候。ついては、温和なる
氣質にて、成るべくは、相當の教育ある十
三四歳位のもの、もし御心當りあらば、御
周旋下されたく候。給料は、大抵、世間の例
もあることゆゑ、然るべく御定め下され
たく候。右、御頼み申し上げ候。

周旋

返事

希望。

御申し越しの子守女一人、心あたり御座
候。右は、當年十三歳にて、一昨年、尋常小學
校を卒業せし後、もっぱら、家事の手傳ひ
をいたし居り、いまだ、奉公したることな
きものに候。同人は、至って、温和なる性質
のものゆゑ、多分、御役に立つべしと存じ
候。参りたる上は、十分に御しつけ下され
たく願ひ奉り候。當人のためになる事と
て、兩親も、ひたすら、それを希望いたしを
り候。明日は、ともかくも、御宅へ伺はせ申

すべく候。給金のことは、しばらく御使ひ
なされたる上にて、御取りきめ下された
く候。

子守女ナドハ、大抵、幼少ノ時カラ、父母ノ膝モ
トラハナレテ、他人ノ家ニ奉公シテアルモノデ
アリマス。ソレユエ。コレヲ使フニハ、ソノフゼン
ヲ思ヒヤッテ、ヨクセワヲシテヤラネバナリマ
セン。

「ワガ子ナラトモニハツレジ夜ノ雪。」

第十一課 老人ノ眼識

アルトコロニ、勤勉ト儉約ノ徳デ、一代ノ

豪商。中ニ豪商トナッタ一人ノ老人ガアッタ。

コノ老人ハ、小僧ヲ一人雇ヒ入レヨウト
募集。思ッテ、新聞ニ廣告シタ。トコロガ、コノ募集

ニ應ジタイトテ、五十人ホドモ集ッテ來タ。

ソノ中ニハ、名アル人ノ保證狀ヤ、高等小
學ノ卒業證書ナドヲ持ッテ來タモノモ、大
分アツタ。シカルニ、コノ老人ハ、何モ持ッテ
來ナイ一少年ヲ雇ヒ入レタ。

番頭等ハ、フシギニ思ッテ、ソノワケヲ老
人ニ尋ネタ。スルト、老人ハ、ツギノヨ一ニ答

へタ。

靴
「アノ少年ハ一番タシカ十保證ヲ見セタ。
ソノ保證ハ、イクツモアルガ、マヅ、第一ニ、ア
ノ少年ハ、家ニ來タ時、靴ノ泥ヲヨク拭ヒ落
シタ。コレガ、アノ少年ノ清潔ヲ好ム保證デ
アル。」

第二ニ、アノ少年ハ、チンバノ少年ガ後カ
ラ來タノヲ見テ、オノレガ掛ケテ居タ椅子
ヲアケテ、ソノ少年ニ腰ヲ掛ケサセタ。コレ
ガ、アノ少年ノ深切十保證デアアル。

第三ニ、アノ少年ハ、オチツイテ、面談ノ順
番ヲ待ッテ居テ他ノ少年ノヨ一ニ、面談ヲ
待チ遠ク思フヨ一スガ見エナカッタ。コレ
ガ、アノ少年ノ辛抱強イ保證デアアル。

第四ニ、アノ少年ハ、呼ビ出サレタ時、五六
挨拶サキデ、一度丁寧ニ挨拶シテ、ソレカラ、自
分ノ前ニ來タ。自分ガ何カ問フト、早速答ヘ
明瞭タ。ソノ言葉ハ、非常ニ明瞭デアッタ。コレガ、
アノ少年ノ禮儀ヲ重ンズル保證デ、マタ、事
ノワケノ、ヨクワカル保證デアアル。

拾

第五ニ、アノ少年ハ、室ヲ出ルトキ、落チテ
 井タ針ヲ拾ヒ上ゲテ、机ノ上ニ載セタ。コレ
 ガ、アノ少年ノ注意深イ保證デアル。

確

ドンナ保證狀デモ、コレホド、確カナモノ
 ハナイ。ソレユエ、アノ少年ヲ雇ヒ入レタノ
 デアル。

番頭等ハ、コレヲ聞イテ、一代ニ、コレホド
 ノ身代ヲツクル位ノ人ハ、ソノ眼識ノ高イ
 コトモ、マタ、別段デアル。ト思ツタ。

第十二課 伊藤主奴

伊藤主奴ハ、尾張名古屋の人なりき。その
 家、世々醫を業とせしかば、主奴ハ、幼より植
 物の學に志し、近國の山野をめぐりて、植物
 を採集したり。

十九歳のとき、京都に出でて、洋書を學び
 植物學の大家と相往來して、大いにその見
 聞を廣めたり。後、江戸に出でて、關東の植物
 を研究し、二十五歳の時、長崎に赴き、和蘭人
 シーボルトを師として、博物學を學びたり。
 主奴ハ、郷に歸る時、シーボルトより、記念

として、多くの珍書をもらひければ、この書によりて、植物分類法を作り、これを幕府に獻じたり。

その後、主君はその採集せる植物腊葉十冊をシーボルトに贈りたり。シーボルト、深くこれを愛重し、携へ歸りて、和蘭の博物館に寄附したり。

同國の博物學者は、みな、この腊葉につき
て研究し、かつ、その著書中に「シーボルト氏
の友人、日本尾張の伊藤圭叟氏採集の植物

腊葉」と題して、精密なる解説目録を掲げた
りといふ。



既にして、圭公の名聲、大いにあがりしかば、圭公は、士族に列せられ、まもなく、幕府の召に應じて、簞書取調掛となりたり。

維新の後、主



著書

維新。

擔當。

みは、大學、あるひは、文部省に出仕して、久しく、植物學の教授と、植物の取調とを擔當したり。明治十三年には、學士會院會員に選ばれ、同じき二十一年には、理學博士の學位を授けられたり。

男爵。

明治三十四年一月、圭は病みて歿しぬ。年九十九なりき。病篤きに及び、天皇陛下には、その學術に盡せる功勞の大なるをよみして、華族に列し男爵を授け給ひたり。これより先、圭は、また、東京帝國大學の名譽教

高齡。

授にあげられたり。

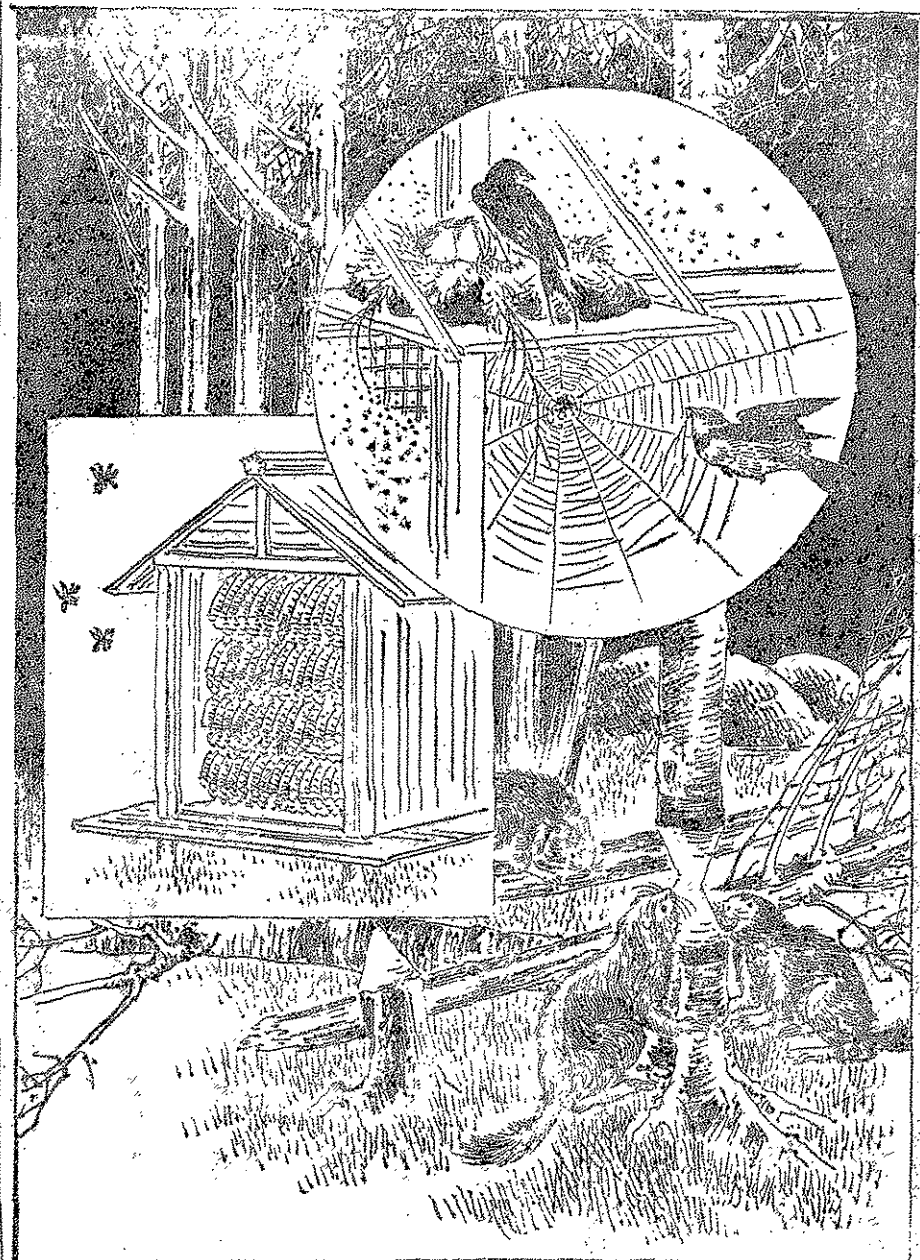
圭は、高齡にのぼるも、身體健全なりしのみならず、心力はめてさかんにして、死に至るまで研究をやめざりき。その編述せし圖書數百卷に及びたりと云ふ。

第十三課 動物の工藝

動物界を觀察すると、いろいろのおもしろいことがある。中でも、蟲や鳥獸の、無心でするわざが、よく人間の工藝に似てゐるなどは、もつとも、おもしろいことである。

野蜂は、製紙家といってよい。そのこしらへた巣を見ると、とまつた西洋紙のようである。人は紙をつくるに、楮みつまたぼろなどを原料にし、いろいろの器具さへつかふが、野蜂は、ただ、朽ちた木を原料にして、口のみで、これをこしらへる。

釀造。蜜槽。意匠。 蜜蜂は、蜜の釀造家である。その原料は、みな、花の蜜槽から取り集めたものである。また、意匠に富んだ建築師ともいはねばならん。口の外に、何一つの器具も持たないで、各



室を正しい六角形にし、室と室とをよく密接させ、壁一重が、みな、兩用になるよゝな巢をこしらへるてぎは、實に感すべきことである。

蠶は、紡績者である。人は、絲をつむぐに、こみ入った機械をつかったり、いろいろと手数をかけたりするが、蠶は、ただ、口一つで絲をこしらへる。

その他、蜘蛛は、編物師であつて、美しい網を編む。蟻むぐらもち、坑夫であつて、地中

蜘蛛

鋸 塗

に長い穴をほる。燕は、左官であつて、巢と泥で巢を造る。海狸は、大工と左官をかねたもので、齒を鋸として木を伐りたふし、尾をこてとして、泥を塗り、上手にその住家をこしらへる。

第十四課 動物の生存競争

動物界に行はるる生存競争は、きはめてはげしきものなるがゆゑ、動物は、いづれも自護の具をとなへざるはなし。しかして、その具は、あるひは、色彩により、あるひは、體形

色彩

により、あるひは機能によるなど、各自一様ならず。

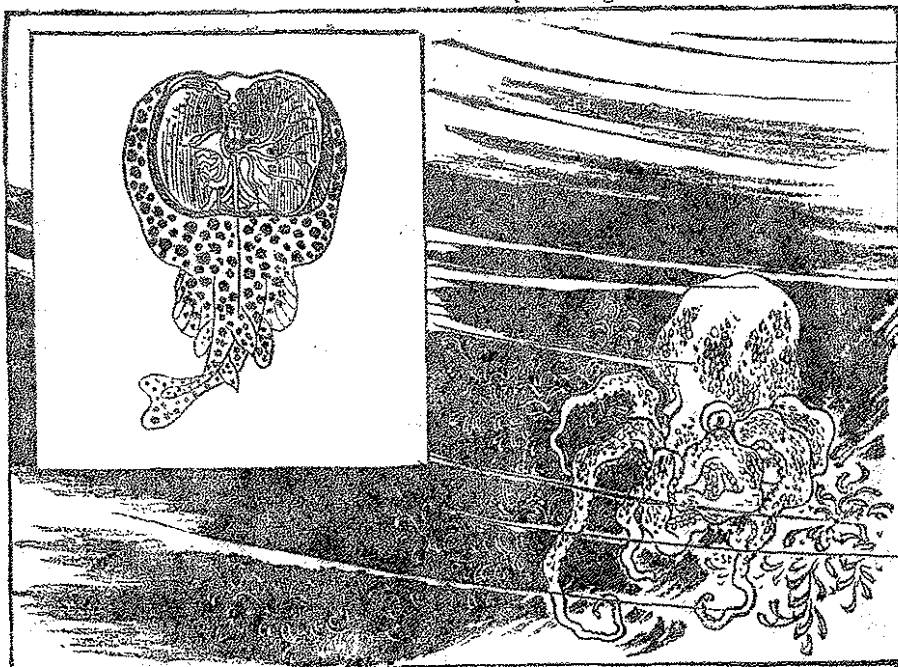
たこの海底に居るや、その居るところの岩石・泥砂の色にしたがひ、灰色、あるひは、青色に變じて、巧に小魚の眼をくらまし、その近よるを待ちて、これを捕へ食す。

年中雪ある地の鳥獸には、白色のもの少なからず。また、冬のみ雪ある地の鳥獸には、夏冬によりて、毛色を變ずるものあり。その他、樹に止れる蟬は、樹皮に似て、その姿、容易

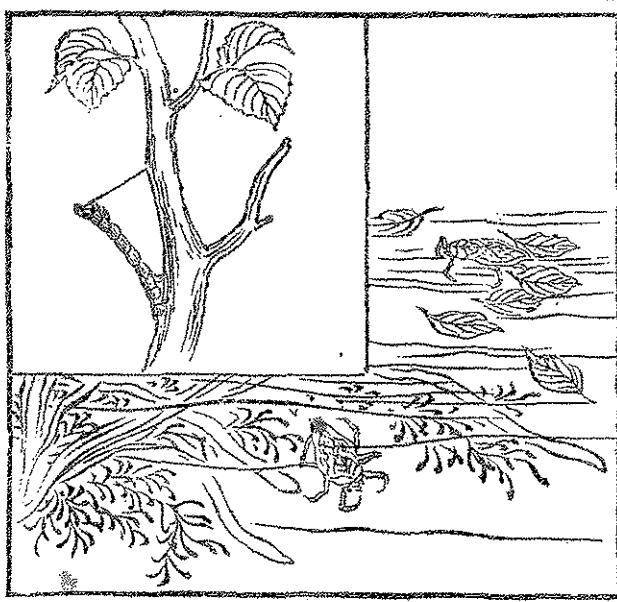
蟬

徘徊
隙

に見とめ難し。これ等は、みな、その色彩を以て、身を護る具に供せるものなり。蜘蛛の一種には、みづから網を造らずして、常に、蟻の群中に交り、ここかしこを徘徊し、蟻の隙を窺ひて、これを捕



觸角。



に似たる、竹節蟲の、竹の小枝に似たるが如

ふるものあり。その形は、すこぶる蟻に似たれども、蟻は六脚にして、蜘蛛は八脚なるがゆゑに、前脚の一對を前方にのばして、蟻の觸角の如くせり。

又、みづがまきりの、水底に沈める落葉に似たる、桑の樹にすめる尺取蟲の、桑樹の枝

きは、みな、その體形を以て、身を護る具に供せるものなり。

いかたこは、脚に吸盤を有して、他の魚蟲に吸ひつく働きをなし、また、體內に黒汁を備へ、強敵來れば、これを吐き、跡をくらましてのがれ去る。

その他、しびれえひは、頭の中に發電機を備へ、敵に襲はるる時は、電氣を傳へて、敵を麻痺せしむ。又、くさがめは、惡臭を放ちて、敵の攻撃を避く。これ等は、みな、その機能を以

惡臭具。麻痺具。

て、身を護る具に供せるものなり。

鳥獸蟲魚ハ、ミナ、ソレゾレ、自護ノ機能ヲ備ヘ
テアルノニ、人間ダケガ、コノ機能ヲソナヘテ居
ナイノハ、何故デアラウカ。又、カヨ―ニ、ヨワサウ
ニ見エル人間ガ、何故ニ、コノ世界ヲワガ物ニシ
テ居ルノデアラウカ。

ソレハ、人間ニハ、知識ガアッテ、イカナル自護
ノ具ヲモ發明スルコトガ出来、マダ、徳義ガアッ
テ、ヨク協同一致スルカラデアアル。

第十五課 七福神の話

昔、僧天海、徳川家康にまみえて物語しけ

杖

る時、人の福に七つあり。とて、これを悉がき
て示したることありき。これ、世に傳ふる七
福神の畫なりといふ。

大黒天は、右の手に打手の小槌を持ち、左
の肩に袋を負ひて、米俵の上に立てり。これ、
富有のさまをあらはせるなり。その、大いな
る頭巾を被れるは、上を見ることなかれ。と
の意を示せるものなるべし。

恵比須は、烏帽子をかむり、袴衣を著て、釣
竿を持てり。これ、勤勉のさまを寫せるなり。



布袋は、身體肥大にして、穩かなるさま、となはれり。その、大なる袋を、持てるは、何物をも、みな藏め、おくと、の意にして

度量の大いなるを示せるものならん。

福祿壽は、頭長く、身短くして、髭多し。而して、温厚篤實の相、おのづから備はれり。これ、人は、身體人並ならずとも、中に温厚篤實の美を備ふれば、かならず、人望の歸すべきことを寓せるなり。

毘沙門天は、甲冑に身をかため、手に矛を持ちて立てり。これ、武を以て惡をこらし、侮をふせぐ意をあらはせるなり。

辨才天は、容姿の極めて美麗なるが上に、

溢 愛敬も、また、溢るるばかりなり。これ、愛敬の
必要なるを示せるなり。

童顔。 壽老人は、童顔白鬚にして、柔順と和樂と
の相を備へたり。これ、柔和にして、心を煩は

すこと少なければ、命長かるべきことをあ
らはせるなり。

第十六課 孔子

孔子ハ、今ヨリ二千四百餘年ノ昔、支那ノ
魯國ニ生レキ。幼時ヨリ、ソノ行、尋常ノ兒童
ニ異ナリテ、遊ビ戲ルルニモ、荒々シキコト

官。吏

ナク、オノヅカラ、禮儀作法ニカナヒタリキ。
孔子成長ノ後、會計官吏トナリシニ、計算
精シクシテ、少シモ誤ラザリキ。マタ、牧畜ノ
事ヲ司リシニ、飼養ノ法宜シキヲ得テ、牛羊、
大イニ繁殖シタリキ。

執政。

奸臣。

誅

ソノ後、孔子ハ、執政ニアゲラレタリ。當時
魯國ハ、外ニ強敵アリ、内ニ奸臣アリテ、國政、
キハメテ困難ナリシガ、孔子ハ、ヨク、コノ間
ニ立チテ、敵國ヲ屈シ、奸臣ヲ誅シ、文教ヲ興
シ、カツ、兵備ヲモ整ヘシカバ、ワヅカニ、三箇

月ニシテ、國內大イニ治マリタリ。

倦

サレド、幾程モナクシテ、魯ノ君主、ヤウヤク、政ニ倦ミ、カツハ、隣國ノハカリゴトニ陷



リシガタメ、孔子ニ對スルアシラヒ何トナク、オロソカニナリシカバ、孔子ハ、ツビニ、

職ヲ辭シタリ。

コノ時、支那ニハ、數多ノ諸侯アリテ、國々ヲ領シ、互ニ威カヲ爭ヒテ、天子アレドモ、コレヲ尊ブモノナク、人民苦メドモ、コレヲスクフモノナキ有様ナリキ。

歎

孔子ハ、コレヲ見テ、大イニ歎キ、アマネク諸國ヲ巡リテ、天子ヲ尊ビ、人民ヲ愛スベキ理ヲ説キタリシカド、用キラレザリシノミナラズ、カヘリテ、シバシバ、危難ニ出遇ヒタリ。カカル有様ナリシカバ、孔子モ、今ハ、ソノ

道ノ行ハレザルヲ知リ、國ニ歸リテ、モツパ
ラ、教育ニ從事シ、カタハラ、有益ナル書ヲ著
シタリ。

孔子ハ、カク、當世ニ用キラレザリシガ、後
世ニ至リテ、ソノ道、大イニ行ハレ、ソノ身モ、
永ク、聖人トアガメ尊バルルニ至レリ。

第十七課 威海衛の激戦

威海衛は、旅順口と相對して、直隸灣の口
扼する要害の軍港なり。されば、明治二十
七年十一月、旅順口陥りし後、清國は、ひたす

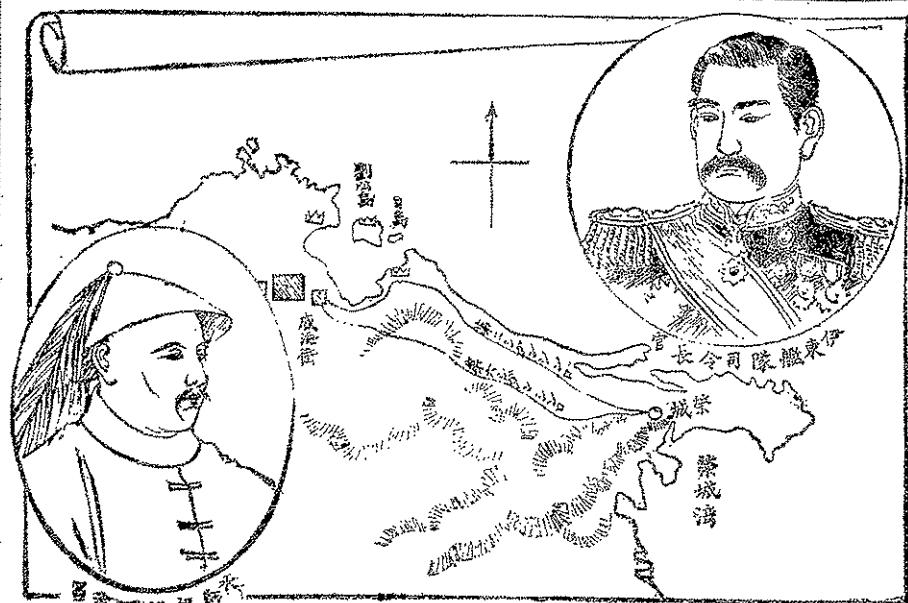
扼

ら、これが防衛に力を盡し、港内には、北洋艦
隊を屯せしめ、港口には、水雷、防材等を敷設
して、わが艦隊の侵入に備へたり。

屯
侵入。

明治二十八年一月三十日、わが陸軍は、榮
城灣より上陸し、威海衛に向ひて進み、摩天
嶺、百尺崖等の砲臺を襲ひ、激戦數時にして、
十二箇所の砲臺を、ことごとく占領せり。

この時、威海衛の港内なる北洋艦隊は、こ
れを見て、しきりに、壘上なるわが兵を砲撃
し、その勢は、なほだ猛烈なりしかば、わが軍



は、敵壘にありし大砲
を使用して、これに應
戦したり。

二月七日、わが海軍
は、松島・千代田・嚴島・橋
立の諸艦を劉公島砲
臺へ、扶桑・比叡・金剛・高
雄の諸艦を日島砲臺
へ向はしめ、つひに、數
座の砲臺を破り、火藥

庫を焼きはらひたり。

ここにおいて、わが軍は、港内なる北洋艦
隊を全滅せしめんとし、水雷隊をして、闇に
乗じて、ひそかに、港内に進み、めざす敵艦に
近づきて、水雷を發射せしめければ、定遠・來
遠・威遠の諸艦、相ついで沈没したり。

提督。
哀求。

りたれば、みな、わが軍に降服し、提督丁汝昌
は、士卒の助命を哀求して自殺したり。

二月十七日、わが艦隊は、敵の諸艦・砲臺等

を受け取りたれば、威海衛は、まったく、わが軍の手に落ち、日章の國旗は、高く、砲臺の上にひらめきけり。

第十八課 水雷ノ話

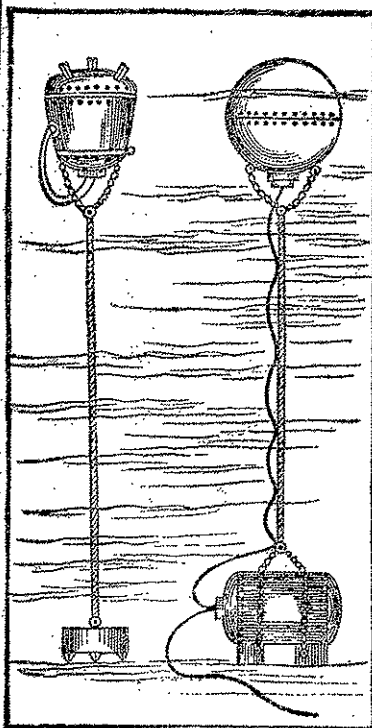
軍艦ノコシラヘ方ガ、ダンダン進ムニツレテ、大砲ヤ砲臺ナドノコシラヘ方モ、次第ニ進ンデ來タ。シカシ、ソレデモ、マダ、軍艦ヲ破壊スルニハ、十分デナカッタカラ、様々ニ工夫シテ、ツヒニ、水雷トイフモノヲ發明スルヨ―ニナツタ。

破壊

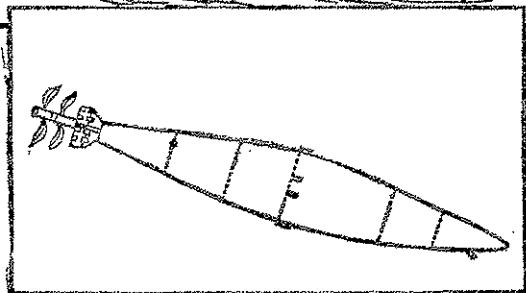
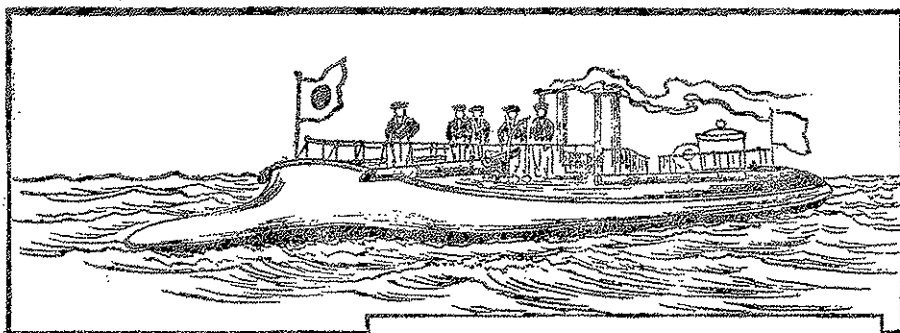
防禦 罐

爆裂

水雷ニハ種々アルガ、コレヲ大別スレバ、二種トナル。一ハ、敵艦ヲ攻撃スル水雷デ、他ノ一ハ、敵艦ノ進入ヲ防禦スル水雷デアル。防禦用ノ水雷ハ、鐵製ノ罐ニ火藥ヲ入レテコシラヘテアル。コレハ、オモニ、港ノ中ヤ、ソノ入口ニ沈メテ、敵艦ノ襲ヒ來ルノヲ防グタメノモノデ、敵艦ガ、ソノ上ヲ通過スルト、スグ、爆裂スル仕掛ニ



壓迫。
燐。



ナツテキル。

攻撃用ノ水雷ハ、魚形水雷トイッテ、ソノ形ガ魚ニ似テキル。ソノ長サハ、オヨソ、二間バカリアル。コレハ、燐青銅デコシラヘ、非常ニ壓迫セラレタ空氣ト、綿火藥ト、水雷進行器トヲ、ソノ中ニ備ヘテアル。コレガウチ出サレルト、進行器

ノ仕掛デ、矢車ガ廻ル。ソノ廻ルタメニ、水雷ハ、前ノ方ヘ走ッテ行ク。ソレガ敵艦ニツキアタルト、タチマチ、綿火藥ガ爆裂スルノデ、ドンナ堅固ナ軍艦デモ、アタツタラサイゴ穴ヲアケラレテシマフ。

攻撃用ノ水雷ヲウチ出スニハ、水雷發射管ヲ用ヰル。水雷發射管ハ、軍艦ニモ備ヘテアルガ、特別ニ、コレバカリヲ備ヘタ船モアル。ソレヲ水雷艇トイフ。水雷艇ハ、ナカナカハヤク走ル船デ、闇ノ夜ヤ、霧ノ深イトキナ

驅逐

ドニマギレテ、敵艦ヲ襲フ役目ヲスルモノ
デアル。水雷艇ニ襲ハレルト、大變デアアルユ
エ、ソレヲ防グタメニ、水雷驅逐艇トイフモ
ノヲ備ヘテ置ク。

日清戦争ノ時、ワガ國ノ水雷艇ハ、閩ニマ
ギレテ、威海衛ノ港内ニ入りコンデ、敵ノ定
遠・來遠ナドトイフ堅固ナ軍艦ヲ撃チ沈メ
タ。水雷ノ働キノスサマジイコトハ、コレデ
知ルコトが出来ル。

水雷艇は、海戦の際、水雷を發射して、敵艦を

ち沈むるを任務とする小艇なり。これより發射
する水雷を攻撃水雷といふ。その形、魚に似たる
によりて、また、魚形水雷とも稱す。

水雷には、右の外、防禦水雷と稱するものあり。
これは、主として、自國の港灣、海口等に敷設して、
敵艦の來襲を防禦する用に供するものなり。故
に、また、敷設水雷の名あり。

第十九課 川中島の戰

いでこの度は信玄シンゲンを

撃ちたさんと越後より

信濃に出でし謙信が
率ゐる勢は八千騎

整々

勇める人馬整々と

犀川ちかく來たる時

秋の日ははや暮れはてて

水の音のみいと高し

猶豫

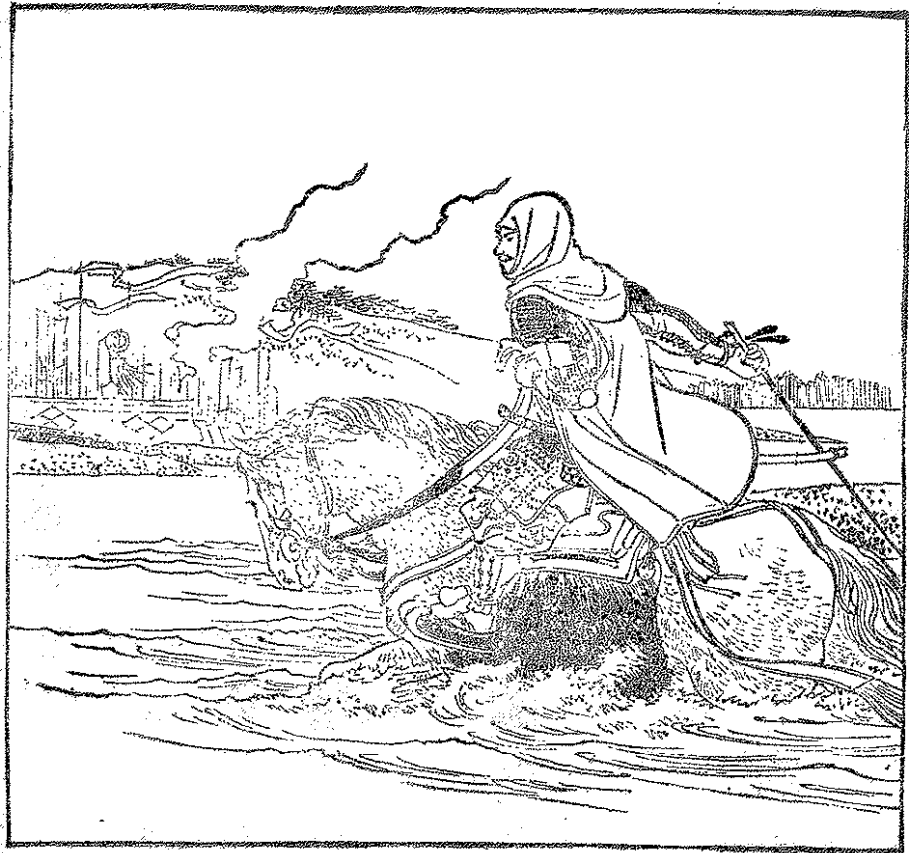
謙信少しも猶豫せず

敵の不意をば撃たんとて

蕭々

鞭のおとなひ蕭々と

波を蹴たてて渡りゆく



隊伍

川中島にいたりつき

隊伍とろへてあるほどに

東天はやく明けとめて

次第にはるる四方の霧

謙信小手をさしかざし

馬上ゆたかに見わたせば

川の向ひに數萬の

甲州勢どひかへたる

吹きながしたる大小の

旗はあらしにひるがへり

雌雄

抜きはなしたる槍刀

のぼる朝日にひらめけり

ああわが敵手好敵手

汝と雌雄を決せんと

十年以來とぎおける

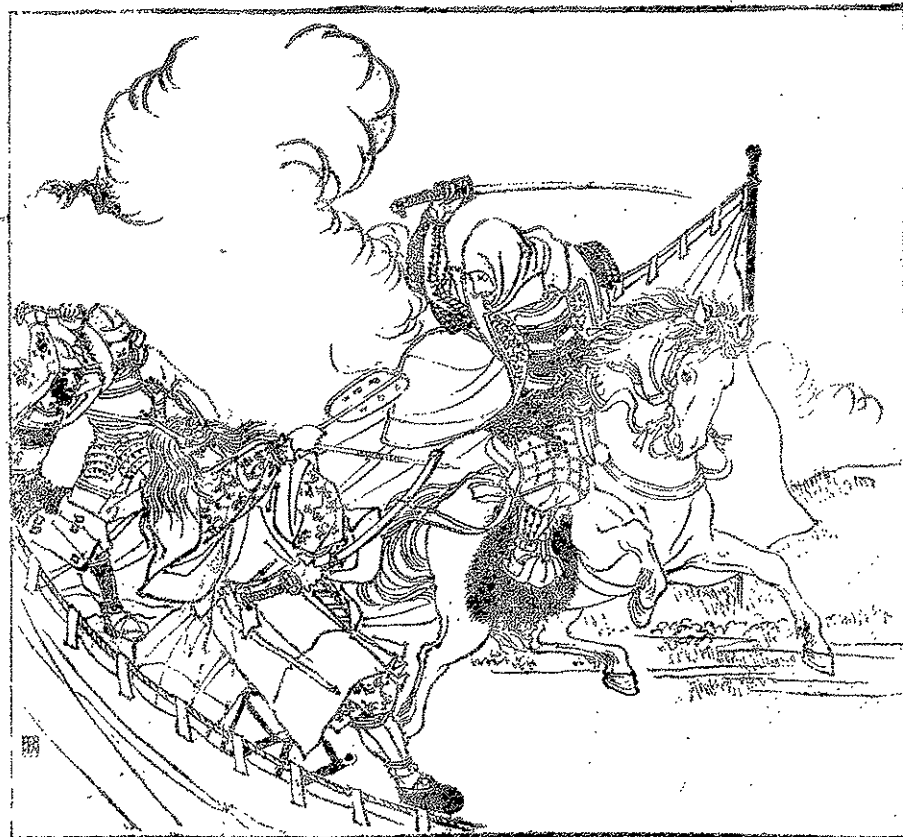
刀の味を今日ぞ知れ

謙信との日のいでたちは

黄なる衣に栗毛の馬

白き布もて顔つつみ

勇みきってど見えにける



斬

たちまち太刀をぬきかざし
をどり進みて信玄の
かたはら近くせまり寄り
ふた太刀三太刀斬りかくる」
雲間をもるるいなづまの
光の如きはやわぎに
信玄傷をおひながら
なほも動かすふせぎけり」
をりから近くかけつけし
甲斐のつはもの一騎二騎

勇みに勇む兩將の

なかをからくもへだてけり」

上杉謙信ト武田信玄トハ、同ジ時代ノ人デ、ト
モニ、スグレタ大將デアリマシタ。コノ兩將ハ、タ
ゼタゼ、信濃ノ川中島ニデテ、ハゲシイ戦争ヲシ
マシタ。

川中島ノ戦争ハ、兩軍トモ、號令ガ明カデ、士氣
ガ振ッテ居テ、ソノ上、規律ガ正シカッタエエ、長
ク、イクサノ手本トナリマシタ。

逸話

第二十課 逸話三題

太閤の大度

畿内

慶長元年、畿内に大地震のあった時、太閤
秀吉は、伏見に居られたが、皇宮の御安否
の心もとなさに、夜中、取るものも取りあへ
ず、京都をさして急いで出られた。にはかの
事であつたから、太閤の家來は、一人も御供
の間に合はず、見舞に來合はせた徳川主從
ばかりが、隨行した。

この時、徳川家康の家來の中には、この暗
夜を幸ひに、太閤をなきものにして、はやく
徳川の天下にしたいと思つて、ひとかに、家

康の袖をひくものがあつた。

太閤は、それと心づいてか、ちよつと立ちとまり、家康をみかへつて、「あれ、老年に及び帯刀、まことに大儀、願はくは、御身代つてこれを持たれよ。」といつて、大小をさし出した。さすがの家康も、太閤の大度に感服したといふことである。

楊震の四知

昔、支那に、楊震といふ人があつた。この人が、ある縣の知事をしてゐた時、あるものが

夜中に、その家に来て、一封の金をさし出し、「これは、ほんの寸志であります。誰も知るものはありません。ゆゑ、どうぞ、御納め下さい。」といつた。

楊震は、きつと容を正して、「天知る、地知る、われ知る、汝知る。それでも知るものがないといふのか。」と詰つた。そのものは、大と一赤面して、すぞすぞとかへつたといふことである。

詰

頼山陽の真率

肖像。

殺。嫌

頼山陽がある時、畫工に、自分の肖像をか
かせた。ところが、畫工は、山陽の機嫌を取ら
うと思つて、いろいろと、餘分な筆を加へて、
りっぱな容貌にかいた。山陽は、これを見て、
「余は、こんなりっぱな男ではない。」といつて、
かきなほさせたといふことである。

第二十一課 郷里の弟に遣はす

この頃は、一こゝ、御様子承はらねど、ま
すます勉強し居らるることと察し居り
候。

小。色
叔父。

一月頃の御手紙によれば、仲間ありて、毎
日、讀本の復習をなし居らるるよし。まこ
とによき心掛けとどんど候。そのついで
に、算術をも復習なされては、いかが。私の
昨年まで用ゐたる算術書は、只今不用ゆ
ゑ、もし、算術を復習するとき、書物なくて、
御こまりもあらんかと存じ、別に、小色郵
便にてさし上げ候。御叔父様はじめ、當地
の皆様、いづれも、御無事なれば、左様、御兩
親様に御傳へ下されたく候。

返事

御手紙ありがたく拜見いたし候。私の學業につき、ふかく御心にかけられ、書物まで御送り下され、御深切のほど、身にしみてかたじけなく存じ候。

この頃は、友だちの都合により、二週間ばかり、讀本の復習を休みをれども、四月になれば、また始むるはずに候。その時は、仲間のものにも、相談いたし、かならず御さしづにとむかぬように致すべく候。御申

通。

し越へのごことは、たしかに申し傳へ候。當方にて、御兩親様をはじめとし、いづれも無事ゆゑ、御安心なされたく候。御叔父様にも御叔母様にも、よろしく御傳へ下されたく候。

第二十二課 釋迦

釋迦は、佛教の開祖にして、今より、およそ二千七百年の昔、印度の北部なる一小國に生れたり。父は、その國の王にして、淨飯王とよばれたりき。

釋迦は、うまれつき、さとくして、幼より學問を好み、また、武藝に秀でたり。長ずるに及びて、衆生濟度の志切なりしかば、十九歳のとき、ひとり王宮を出でて、山中に入り、ばらもん教の僧侶につきて、教を受け、刻苦して、道を修めたり。

されど、釋迦は、久しからずして、ばらもん教の教義の非なることを知りければ、去りて雪山に入り、ひとり黙想すること十數年の後、つひに、大いに悟る所ありて、山を下りぬ。

階級

元來、ばらもん教の教旨は、主として、種族の階級を立て、僧侶をもつとも貴きものと



なし、工人などは、もつとも賤しきものとせるものなりき。

然るに、釋迦は、これに反し、一切平等の慈眼を以て世人を見、貴賤の別を設くるいはれなし。と唱へ、衆生濟度のために、

四方をへめぐりに、その説に服して弟子となりしもの、數千人に達せり。中にも、十人の高第は、よく師を助けて、その教を世にひろめたり。
かくて、その教は、次第に、印度の諸國にひろまりしのみならず、支那より朝鮮を経て、つひに、わが國にも傳來したり。

新編國語讀本 高等小學校 兒童用 卷六終

明治三十四年六月廿五日印刷
同 年六月廿八日發行
明治三十四年八月四日訂正再版印刷
同 年八月八日訂正再版發行

定價		編纂國語讀本高等科	
卷一	二十錢	卷五	廿二錢
卷二	二十錢	卷六	廿三錢
卷三	廿一錢	卷七	廿四錢
卷四	廿一錢	卷八	廿五錢
合計	金壹圓七十六錢		

明治三十四年八月十六日
文部省檢定濟



發賣所

帝國書籍株式會社

東京市神田區南藥物町十番地

著者 小山 左 文 二
著者 武 島 又 次 郎
印刷發行 東京市日本橋區吳服町壹番地 株式會社普及會
代表者 右 社 長 山 田 禎 三 郎

